

# 泌尿器科紀要

第 4 卷 第 7 号

昭和 33 年 7 月

## 随 想

### Nitze 像 に 想 う

和歌山県立医科大学助教授 金 沢 稔

過般、武井器械店より、創業41周年、会社設立10周年を記念して Nitze の肖像を贈られたが、Max Nitze が、Joseph Leister の協力を得て膀胱鏡を完成し、之を Wien の医学会で発表したのは、今を去る78年前の1879年であつた。

もつとも、Nitze 以前にも人体の膀胱内を覗んと試みは、1805年 Bozzini によつてなされたが、勿論実用に供し得べくもない幼稚なもので、1853年になつて Désormeaux が一種の直達鏡を作製し、彼は之を用いて初めて膀胱の内部を観る事に成功した。

然し、電流を用い、光源を膀胱内に置いて膀胱を観察するという意図をもつて、而もプリズムによる光線屈折の理を応用した現在の膀胱鏡と同一原理に基く膀胱鏡を完成した功労者は、何といつても Nitze その人である。

今日、泌尿器科学が独自の境地を開拓し、比較的短い年月の間に劃期的な発達を遂げ、医学の一分科として立派に独立した地位を確保するに至つたのは、実に Nitze を開祖とする内視鏡の飛躍的な発展の歴史がその底流をなして貢献している事に思いをいたさねばなるまい。

このように内視鏡は主としてヨーロッパで発達して、米国に於ては Young, McCarthy 等の指導のもとに数多くの精密な器械が作製されるようになり、今日では質的にも、その品種の多い事に於ても、米国は世界を凌駕しているかの観がある。

吾国に於て、初めて膀胱鏡が輸入されたのは明治 27, 8 年頃と仄聞する。そして朝倉文三先生が「膀胱鏡学」を著わされ、初めて普及されるに至つたものである。

そして大正 7 年末、坂口勇氏の指導により吾国初めての検査用膀胱鏡が武井勝氏により完成され、第 8 回の日本泌尿器科学会総会に於て和製膀胱鏡供覧と題して坂口氏により紹介された。そして今日見るが如き立派な国産膀胱鏡其他の泌尿器科的器械が生れるに至る迄には、同氏が幾多の技術上の困難、経済上の危機或いは中傷と闘つて来た尊い苦闘の道があつた事を振り返らねばならない。

国産内視鏡も改良に改良を加えられ、優秀なものとなりつつある事は認めるが、現在の段階では、まだ何といつても外国製品に較べると品質的にも劣るようであるし、その器具の種類からいつても、もつと創意工夫をして新しいものを作り出すよう努力して貰い度いと念願するのは私のみでなからう。

一昨年、Los Angeles の Barnes 教授のもとに留学された伊藤博士から、同教授がドイツで発刊される泌尿器科学の Encyclopedia の Endoscopy 部を執筆中で、その中の一章に日本に於ける器械を紹介しようとしてされているというお便りを頂いた事がある。その一章というのは、forward, foroblique, right angle, retrograde の、約170°の視野を見る事が

出来る McCarthy “periscopic” Cystoscope を紹介し, “a similar instrument is manufactured in Japan and used widely in that country” というわけであるが, similar instrument といつても, periscope のように rear surface mirror を動かす事によりこのような広視野を見得る便利なものはなく, 両側尿管口を同時に見得る wide vision のものと, retrograde のものがある丈である. 必然的にこの Encyclopedia の原稿は残念乍ら書き改められた事であろう.

又, 伊藤氏は主として transurethral resection を習得して来られたのであるが, 本邦製品では cutting current が十分でなく, 切除が不十分であるとの事であつた.

それかといつて, Stern McCarthy の electrotome 一式を取り揃えるにはあまりにも高価すぎるので, 早く国産の優秀なものが出来て, 同氏により TUR を本邦にも普及させて頂き, この方面の立ち遅れを何とか取り戻し度いものと念願していたが, 最近武井が, Birtcher の electrosurgical unit を参考にして鋭意改善に力を注ぎ, 実用に供し得るものが出来つつある事を聞いて慶賀に堪えない.

其他, Kirwin Cystoscope, Butterfield female Urethroscope 等吾々の羨望に堪えないような器械はいくらでもある. 膀胱の天然色映画や, テレビジョンなども行われている.

器械などあまり重視しない人もあるかも知れないが, 凡そ, その国の泌尿器科学の発達の程度は instrumental Urology のそれと平行するものと思われる.

そうかといつて, 高価な器械ばかり作つても, 日本の現状では需要, 供給の均衡が保たれないという事もある.

然し, 茲に各腎機能検査というような, 泌尿器科領域に於ける最も基礎的な問題について考えて見ても, 日常行われるインデゴカルミン試験, 排泄性腎盂撮影などは正確な検査とは云い難く, 其他の検査法も複雑な割に微妙な種々の影響を受け易く, 実際に臨床に役立たせ得るものは尠い現状である.

外科的腎疾患を取扱う上に於て, 保存手術の是非の判定, 両腎疾患に於ける第一次手術側や第二次手術時機の決定, 予後の判定等に当つては, 各腎機能を分節的に而も正確に測る事が望ましく, 現在の段階ではクリアランス法に優る腎機能検査法はないのであるから, どうしても完全な腎分尿について之を行う事が必要であるに拘らず, その為の適当なカテーテルが従来本邦にはなかつた為, このような事すら今迄行われなかつた事は遺憾である.

吾々は, フランス製尿管カテーテルと小ビニール管, 良質のゴム囊を用いて balloon catheter を試作し, 之を用いて各腎クリアランスを実施しているが, 本カテーテルを用いるとクリアランス以外種々の腎生理の解明に尠なからず役立たしめる事が出来るものと考えている.

之はほんの一例であるが, このような事が案外吾が国の泌尿器科学の盲点となつていないかと考えられる.

Nitze の Cystoscope も Leister の協力がなければ完成されなかつたであろう. 日本の Urologist も, この国の instrumental Urology を確立する為にまだ多くの努力を払う余地はあると思われる. 泌尿器科学講座の分離, 独立の問題も, 掛け声丈では実現する筈はないし, 天降り式のものでは結果として思わしからぬものになる懼れがある. 日本の医療制度のあり方をよく分析し, 各大学なり病院の実情に則して着実に之が実現の方向に進めて行くべきであり, 単なる外科の一分科というような通念から脱却せしめる為にも, その特殊性と独立の価値をもつと実績を以て一般に周知認識せしめる必要があろう. instrumental Urology はそのような意味からも関心をもつべき事柄ではある.